

## 審判講習会 参加報告書

平成 29 年 5 月 16 日

報告者 山崎 主水 印

この度参加しました、審判講習会について報告します。

なお、この報告書が、審判委員会ホームページ等に掲載されることを了承します。

講習会名 (大会名)	内閣総理大臣杯争奪第 45 回記念日本車椅子バスケットボール選手権大会
参加者 (報告者)	山崎 主水 (所属カテゴリー) クラブ連盟
期 日	平成 29 年 5 月 2 日 (火) から 平成 29 年 5 月 5 日 (金)
会 場	東京体育館
参加者	菅野 英輔、杉山 兼芳、門川 浩人、加藤 昌樹、増竹 昇、岸 良太郎、平田 貴浩、一箭 良枝、齋藤 登、蝦名 准、小野 裕樹、斗沢 祐香、二階堂 俊介、佐藤 勝信、児玉 陽子、宮古 幸夫、後藤 信之、松元 健、免田 佳子、四方田 麻菜美、田中 敏弘、小嶽 悠、金川 光一、今村 和成、鈴木 健児、福田 典子、山崎 主水、川村 貴昭、正岡 京子、初瀬 真由子、三木 大助、岩田 靖雄、佐治 弘基
報告① 講話	<p>3PO についての研修 (菅野 英輔氏より)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・1つのゲームを3人のクルーで1つのチームとして取り組んでいく。お互いの判定をそれぞれが理解し、メカニクスの理解、マニュアルの実践を行いながら、3人でゲームを仕上げていく。ここにいる全員が大会の成功という共通の目標にむかってチームとなる。</li><li>・マニュアルの基本4原則に大きな変更はない。よりよい判定のためのツールとして大事にする。<u>stationary=ただ動かない</u>というのは誤りで、今一度認識をしておいてほしい。オールウェイズ・ムービング、スペースウォッチングを再確認し、目的なく動き、自身でブラインドをつくるのはやめなければならない。誰も見ていないプレイをなくすために、プライマリーの理解が必要。3人が同じようにメカニクスを理解して、コート上を同じように動くことが重要。相手のポジションを気にすることなく、自分のポジションを気にしすぎることがないようにする。メカニクスは試合前に理解しておくことなので、プリゲームではメカニクスのことを話しすぎない。試合中は <u>TERMINOLOGY (用語)</u> を用いて、短い言葉で相手に意思を伝える、クルーの話聞くことが肝要。用語では、特にオヴィアスプレイをこぼさないこと、そしてレフェリー・ディフェンスが1番大事。これを意識して、位置取り、アングルを取る。</li><li>・判定について、上記のレフェリー・ディフェンスを掘り下げていく。<u>自分のプライマリー・エリアにいるオフenseそしてディフェンスを見つけ出す</u>。そしてアングルを取る。ツール (技術) として、アウトサイドインから 45 度の角度を取る、クロスステップを用いる。見えていないならば振り返る。何が見えていて何が見えていないのかを把握し、自分の「<u>オープン・ルック</u>」をキープし続ける。</li><li>・責任分担エリアの意味について。自分のエリアでオフenseとディフェンスが何をしているのかをとらえる。<u>自分のエリアから出て行くプレイヤー、入ってくるプレイヤーも含めて</u>。ただし、エリアはあくまでも参考のエリア。自分のエリアを1歩出ると、絶対に吹いていけないというこ</li></ul>

	<p>とはない。3PO の図示にもあるとおり、扇形のアンクルと重なっているところは判定をしていい。「プライマリー・アンクル」もあって然るべき。プライマリー・エリアは死守。<u>近い審判、向かってくる審判員が判定をするということは必ずしもない。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・VIDEO を見ながらポジショニングの確認。FIBA との違いは、セットアップポジションは、サークルの半円（架空の）のところ（低いところ）で低くポジショニングすること。基本はサイドラインと平行に位置する。</li> <li>・オフィシエーティングの基本はローテーション。①ローテーションは「交差点」、走ってはいけない、テンポよく移動する。だが自分のセットアップに戻る時は急ぐ。②スキッピングザペイント、ペイントに自分の見るプレイがなければ、行く先のプレイを見て OK。③ニュートレイルになる時はリードがセットアップに入るまで、センターはアンクルを保ち続ける。リードはまずチャレンジが重要。迷うのであればまず行ってみる。失敗と成功の繰り返しを続けて、よりよいアンクルを保ち続ける。オープンルックが大事。</li> <li>・トランジション時はプレイヤーと平行に戻らない。アウトサイドインを保つ。IWBF は 8 秒でニューリードに入るとされているが、FIBA の 4 秒に近い意識を持つ。ラインディフェンスをしてもセットアップしてオープンアンクルを取る。プレスの時は体の向きを変える。多数決の原理で、6 人以上いる方でツーメンを組む。</li> <li>・まとめとして、センターはミッドラインの意識を強く持つ。<u>IOT (Individual Officiating Technique)</u> 以外のことはしない。コールはしっかり止まって静止した状態で行う。</li> </ul>
<p><b>報告②</b> <b>ルールテスト</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■要項 制限時間 30 分、問題 20 問</li> <li>■内容 <ul style="list-style-type: none"> <li>・車椅子バスケット特有のルールを問う問題（リフティング、ジャンプ、ヴァイオレイション等）</li> <li>・新（現行）ルールについて</li> <li>・あるプレイのシチュエーションが提示され、どのように判定するのかを問う問題</li> </ul> </li> </ul> <p>⇒終了後採点、ルール解説</p>
<p><b>報告③</b> <b>ゲーム</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ゲーム 日時 5月3日（水）11時00分～トスアップ TEAM EARTH 対 千葉ホークス</li> <li>■割当 主審 蝦名 准 氏 副審1 今村 和成 氏 副審2 山崎 主水（報告者）</li> <li>■プレ・ゲーム・カンファレンス 3PO メカニクス、3人の協力の確認を入念に行った。3人のプライマリーエリアへの意識を持ちプレイの確認をしっかりと行うことの確認。リード時において、ボールの位置と展開に合わせてクローズダウンポイントへ足を運ぶこと、必要と感じた時にはスイッチサイドへのスムーズな移動を行うこと。センターレフリー時の視野の当て方、ボクシングインを明確にかけにいくことを確認し、判定については距離だけにとらわれず、捉えられたものをしっかり判定していくことを話し合った。また、IOT についても確認をし、動きながらの判定にならないようプレイの予測と起こることへの準備を意識することでプレーに遅れず落ち着いて正しい判定に結びつけられるよう努力することなどを確認した。</li> <li>■反省と次への課題 日本選手権という大会や会場の雰囲気など普段味わうことの出来ない環境ということもあり、緊張や浮き足立つような精神状態を感じることがありました。しかし、プレ・ゲームでの</li> </ul>

	<p>話もありクルーの一体感や安心感を同時に得ることもでき、個人的には比較的落ち着いて臨めたと感じています。その中で反省としては、ルールを理解です。瞬間的に正しい判定を継続させることのためには、しっかりとルールを身に付けることが重要であると感じました。そして、ゲームに合わせた判定基準を感じられるかどうか重要であると感じました。ルールを知っていてもゲームを感じる事が出来なかつたり、捉えることが遅れてしまつたりすることで、選手は不満やフラストレーションなどを感じて、本来のパフォーマンスが発揮出来なくなつてしまうことを今回、自分の判定を通して痛感しました。</p>
<p>報告③ ゲーム</p>	<p>■ゲーム 日時 5月3日(水) 14時30分～トスアップ 宮城 MAX 対 岡山ウィンディア</p> <p>■割当 主審 三木 大助 氏 副審1 山崎 主水 (報告者) 副審2 斗沢 祐香 氏</p> <p>■プレ・ゲーム・カンファレンス この試合については、A級審査のゲームであった。全試合同様3POメカニクス、3人の協力の確認を入念に行った。プライマリーエリア、タイマーやレポートなどのマニュアルの確認、プレイヤーのバランスによってのお互いの役割と協力についてなど1ゲーム通して緊張感と勇氣と集中力を持って取り組むことを話し合った。</p> <p>■反省と次への課題 宮城はこれまでこの日本選手権で連覇しており、実力もトップクラスでした。内容としては、宮城の実力を見せつけられた圧倒的なものでありました。個人的なゲームへの取組として、プレイの始まりを意識して捉えようとする、全体を視野に入れながらプライマリーエリアの確認と捉えなければならないプレーへの準備を行うよう努力しました。結果としては、判定が試合を通してマッチしきれていませんでした。接触はあるものの、接触の影響が無い、もしくは少ないものや、その後にプレイが継続できるものについてもファウルとして取り上げてしまいました。また、プレイへの捉え方が甘く、選手が気にしていることと自分が捉えようとしていることが上手く噛み合わず、ストレスを感じさせてしまいました。以上のことから、自己分析としてゲームレベルに自分自身の判定力やゲーム感がマッチ出来ておらず、また、雰囲気や状況に自分が影響され不安定な状態でコートに立っていたと反省しました。</p>
<p>所感</p>	<p>今回、日本選手権という大きな大会のコートに立てたということについて大変ありがたいと感じています。また、これまで取り組んできたことと自分自身の現在地を知ることができ、大変有意義な時間だったと感じています。特に今回、マニュアルの変更があり、対応していくことに苦慮し、これまでの取り組み方とは大きく変わったもののように初めは捉えていました。しかし、その中で感じる事として、プレイの理解をしてチームの状況を捉えること、予測をしてより良い位置とアングルでプレイを捉え続けゲームにマッチした判定を続けることは、これまでのマニュアルの目的地とよく似ているのではないかと感じました。この大会に参加させていただき、まだまだ足りないものだらけの自分と今後の課題をたくさん教えていただきました。この経験を大切にし、課題を克服し、関わるチームに少しでも良かったと思われる審判になりたいと思います。えひめ大会まで残り少ない時間ですが、仲間と協力し共有して大会を成功させたいと思います。ありがとうございました。</p>

## 審判講習会 参加報告書

平成 29 年 5 月 9 日

報告者 川村 貴昭 印

この度参加しました、審判講習会について報告します。

なお、この報告書が、審判委員会ホームページ等に掲載されることを了承します。

講習会名 (大会名)	内閣総理大臣杯争奪第 45 回記念日本車椅子バスケットボール選手権大会
参加者 (報告者)	川村 貴昭 (所属カテゴリー) クラブ連盟
期 日	平成 29 年 5 月 2 日 (火) から 平成 29 年 5 月 5 日 (金)
会 場	東京体育館
参加者	菅野 英輔、杉山 兼芳、門川 浩人、加藤 昌樹、増竹 昇、岸 良太郎、平田 貴浩、一箭 良枝、齋藤 登、蝦名 准、小野 裕樹、斗沢 祐香、二階堂 俊介、佐藤 勝信、児玉 陽子、宮古 幸夫、後藤 信之、松元 健、免田 佳子、四方田 麻菜美、田中 敏弘、小嶽 悠、金川 光一、今村 和成、鈴木 健児、福田 典子、山崎 主水、川村 貴昭、正岡 京子、初瀬 真由子、三木 大助、岩田 靖雄、佐治 弘基
報告① 講話	<p>3PO についての研修 (菅野 英輔氏より)</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・1つのゲームを3人のクルーで1つのチームとして取り組んでいく。お互いの判定をそれぞれが理解し、メカニクスの理解、マニュアルの実践を行いながら、3人でゲームを仕上げていく。ここにいる全員が大会の成功という共通の目標にむかってチームとなる。</li><li>・マニュアルの基本4原則に大きな変更はない。よりよい判定のためのツールとして大事にする。<u>stationary=ただ動かないというのは誤りで、今一度認識をしておいてほしい。</u>オールウェイズ・ムービング、スペースウォッチングを再確認し、目的なく動き、自身でブラインドをつくるのはやめなければならない。誰も見ていないプレイをなくすために、プライマリーの理解が必要。3人が同じようにメカニクスを理解して、コート上を同じように動くことが重要。相手のポジションを気にすることなく、自分のポジションを気にしすぎることがないようにする。メカニクスは試合前に理解しておくことなので、プリゲームではメカニクスのことを話しすぎない。試合中は <u>TERMINOLOGY (用語)</u> を用いて、短い言葉で相手に意思を伝える、クルーの話聞くことが肝要。用語では、特にオヴィアスプレイをこぼさないこと、そしてレフェリー・ディフェンスが1番大事。これを意識して、位置取り、アングルを取る。</li><li>・判定について、上記のレフェリー・ディフェンスを掘り下げていく。<u>自分のプライマリー・エリアにいるオフenseそしてディフェンスを見つけ出す。</u>そしてアングルを取る。ツール (技術) として、アウトサイドインから 45 度の角度を取る、クロスステップを用いる。見えていないならば振り返る。何が見えていて何が見えていないのかを把握し、自分の「オープン・ルック」をキープし続ける。</li><li>・責任分担エリアの意味について。自分のエリアでオフenseとディフェンスが何をしているのかをとらえる。<u>自分のエリアから出て行くプレイヤー、入ってくるプレイヤーも含めて。</u>ただし、エリアはあくまでも参考のエリア。自分のエリアを1歩出ると、絶対に吹いていけないというこ</li></ul>

	<p>とはない。3PO の図示にもあるとおり、扇形のアングルと重なっているところは判定をしていい。「プライマリー・アングル」もあって然るべき。プライマリー・エリアは死守。<u>近い審判、向かってくる審判員が判定をするということは必ずしもない。</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・VIDEO を見ながらポジショニングの確認。FIBA との違いは、セットアップポジションは、サークルの半円（架空の）のところ（低いところ）で低くポジショニングすること。基本はサイドラインと平行に位置する。</li> <li>・オフィシエイティングの基本はローテーション。①ローテーションは「交差点」、走ってはいけない、テンポよく移動する。だが自分のセットアップに戻る時は急ぐ。②スキヤニングザペイント、ペイントに自分の見るプレイがなければ、行く先のプレイを見て OK。③ニュートレイルになる時はリードがセットアップに入るまで、センターはアングルを保ち続ける。リードはまずチャレンジが重要。迷うのであればまず行ってみる。失敗と成功の繰り返しを続けて、よりよいアングルを保ち続ける。オープンルックが大事。</li> <li>・トランジション時はプレイヤーと平行に戻らない。アウトサイドインを保つ。IWBF は 8 秒でニューリードに入るとされているが、FIBA の 4 秒に近い意識を持つ。ラインディフェンスをしてもセットアップしてオープンアングルを取る。プレスの時は体の向きを変える。多数決の原理で、6 人以上いる方でツーメンを組む。</li> <li>・まとめとして、センターはミッドラインの意識を強く持つ。<u>IOT (Individual Officiating Technique)</u> 以外のことはしない。コールはしっかり止まって静止した状態で行う。</li> </ul>
<p><b>報告②</b> <b>ルールテスト</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■要項 制限時間 30 分、問題 20 問</li> <li>■内容 <ul style="list-style-type: none"> <li>・車椅子バスケット特有のルールを問う問題（リフティング、ジャンプ、ヴァイオレイション等）</li> <li>・新（現行）ルールについて</li> <li>・あるプレイのシチュエーションが提示され、どのように判定するのかを問う問題</li> </ul> </li> </ul> <p>⇒終了後採点、ルール解説</p>
<p><b>報告③</b> <b>ゲーム</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■ゲーム日時 5月3日（水）12時30分～トスアップ 佐世保 WSC 55 対 58 LAKE SHIGA</li> <li>■割当 主審 菅野 英輔 氏（東北・国際審判員） 副審1 立田 裕志 氏（関東・A級審判員） 副審2 川村 貴昭（報告者）</li> <li>■プレ・ゲーム・カンファレンス 1、スリー・パーソン・システムについて、3人の協力の確認 ⇒3人のプライマリーへの意識を強く持ち（自分のエリアは絶対に死守）、役割分担することを話し合う。プライマリーエリアを参考にしながら、プライマリーアングルもしっかり取っていくことを確認した。オールコートプレスの際は、センターレフリーがしっかりと視野を取って、トレイルもしくはリードとの2パーソン・システムを用いることを共有した。難しいケースとして、前の試合で菅野氏と一緒に見ていた現象を具体的に取り上げ、速攻でニューリードの逆側で起こるプレイは、全力でクローズ・ダウン・ポイントまで直進し、ミッド・ラインを超えてリードが判定していくケースがあるということを教わった（＝すべてがクロスコールは駄目ということではない）。自分からは、パートナーを信頼するからこそ自分のプライマリーエリアを死守すること、そして、特にエンドラインでの自分から遠い所で起こるアウト・オブ・バウンズは積極的にアイコンタクトを取っていくことを提示し</li> </ul>

	<p>た。</p> <p>2、両チームの特徴、キーマンについて情報共有</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特に日本代表選手でもあるプレイヤーについての対応（必ず目を当てる）</li> </ul> <p>3、タイム・アウト時のオポジット・サイドでの情報共有について</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新ルールのこともあり、40秒でベンチ・サイドへむかうため、とにかくゆっくりと話し合う時間はない。新3PO マニュアルにある <b>TERMINOLOGY</b>（用語）を使って簡潔に情報を共有し、スムーズな試合運営をしていくことを共有した。</li> </ul> <p>■試合中</p> <p>序盤から接戦の様相で、クロスゲームが1試合通じて行われた。自分の責任エリアのところを、クルーがセカンダリーからカバーしていただいたりしながらも、今の自分にできること、自分の責任を果たそうと必死で試合についていった。判定について、すべてが説得力のあるものとはいえなかったが、特に後半からは笛にして取り上げ、ゲームを進めていった。最後のクロージング・ゲームでは、ファウル・ゲームを察知しながら、最後まで集中して取り組んだ。</p> <p>■試合後（クルー、主任より）</p> <p>ゲームレベル、施設、観客、すべてが新しい経験であったが、最後まで必死に試合にくらいついていった。判定として、転倒するといった大きなプレイの中で、疑わしい時に視野の当て方や位置取りが良くないことがあるので、次への課題にしてほしい。後半の特に終盤、試合が激しく拮抗していく中で、3人が平等にコールをしていき、クロージング・ゲームを無事に行うことができた。基本的な判定はできているので、さらに上のレベルのゲーム、スピード、プレイを経験して行ってほしい。</p> <p>⇒次への課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・普段経験できないゲームレベルへの挑戦</li> <li>・マニュアル・IOTの更なる徹底</li> </ul>
<p><b>所感</b></p>	<p>車椅子バスケットボール最高峰の大会に初めて参加させていただいた感動を胸に、今の自分にできることをすべてオンザコートで出し切ろうと挑戦した。特に試合中は、クルーの方々の支えのおかげで、素晴らしい試合を経験させていただいた。同時に、自分の課題も浮き彫りになった、今回の経験を糧にして、よいレフリーを目指していっそう励んでいく覚悟である。</p> <p>大会期間中のすべての時間において、日本全国、北海道から九州までレフリーの方々からたくさんの学び、気づきを得ることができた。さっそく、地元の仲間と共有し、切磋琢磨していきたい。</p> <p>いよいよ今月末はリハーサル大会、そして全国障害者スポーツ大会が開催される。地元開催地審判員としての役割を果たしていくことはもちろんのこと、オンザコートでは1つでも多くのゲームを担当し、最終日のコートに立つことを目標にして、いっそう励んでいく覚悟である。</p> <p>最後になりましたが、今大会派遣のためにご尽力くださった方々、日本全国のレフリーの仲間の方々、大会に携わったすべての方々へ感謝します。すべては、皆さんの支えがあってこそ、このたびの大舞台での挑戦が叶いました。本当に有難うございました。</p>